山陰の清流・高津川（たかつがわ）にアユと遊ぶ（26.9）

船 本　浩 路

＜高津川との出会い＞

「来年、生きていたらまたお会いしましょう。それではお元気で」。先月、高津川でお世話になった岩手のアユ釣り師、小林さんのお別れの挨拶だった。

高津川は島根県にある日本の代表的な清流である。先日発表のあった 25 年度の一級河川水質調査結果もそうであったが、今までに幾度となく水質日本一に輝いている。この高津川に清流の女王アユを求めて釣行した。大学の後輩で、アユ学に精通している T 博士から、「船本さん、アユ釣りをされているのなら、一度は高津川に行ってくださいよ」と前々から言われていた。アユのプロが言うのだから期待が膨らんでいた。しかし、仕事や遠方という理由で行けなかった。今春に定年を迎えたことでこの夏にチャンスが巡ってきた。出発前に漁協に現地状況を確認すると今年は最悪。また、後輩から教えてもらった宿に電話しても、「今年はアユが釣れないのでお勧めできない」との返事であった。来年にしようかと迷ったが、歳をとったリタイア組であり、毎年が勝負と思いダメもとで釣行した。

高津川は島根県吉賀町田野原に源を発し、津和野町日原、益田市を経由して日本海に注ぐ一級河川で、支流を含めて唯一ダムが一切無い。中上流域ではアユ釣りが盛んである。地域の自慢の川でもあり、毎年 6 月に吉賀町で「水源祭り」が、8 月第 1 土曜日に益田市で「水郷祭」が行われる。

我が家から高津川河口の町、益田市までの行程をカーナビで調べると片道約 500 ㎞もある遠方の地だった。車で行くとなるとそれなりの覚悟が必要な距離だと思われるだろうが、私は、今までに車による遠方釣行は幾度となく経験しており、そんなに苦にはならない。ワゴン車（プリウスα）の後部座席を倒せば、マットを敷いてあるので、眠くなればいつでも体を伸ばした状態で仮眠をとれる準備ができている。7 月の下旬に、夜 9 時半に泉大津を出発した。睡魔が襲ったので仮眠をし、目的地の津和野町日原に着いたのは早朝 6 時ころであった。

高津川

早速、オトリ屋さんで情報の収集。「船本さんのご自宅近くに住まわれ、6 月から滞在している方がおられるので、ポイントや釣り方を教えていただけばよい」とのお返事。お名前は渡辺さん、この方が非常に親切丁寧に教えてくださった。渡辺さんとは和歌山でのアユ釣りのホームグランドが同じなのですぐに親しくなれた。65 歳で完全退職した昨年から、ここで長期滞在をしてアユ釣りをされている。

＜期待の釣果は？＞

高津川のアユ

2 日間、高津川本流と本流以上にきれいな匹見川（ひきみかわ）で渡辺さんの手ほどきを受けながら挑戦した。彼の 3 匹に私は 1 匹のペース。少し焦りを感じたが、水は透き通り、青い空と真っ白な夏雲をバックに周囲は緑の山と水田。まさに日本の美しい農村風景というロケーション抜群の川はその焦りを吹き飛ばしてくれる。数は釣れなかったが（写真参考）、ダムなし、川相良し、水質日本一の素晴らしい川であった。釣りをやる、やらないにかかわらず、川に関心がある方は、是非一度訪ねていただきたい。近くには山陰の小京都と言われる津和野があり、温泉もたくさんある。この地方で有名な石州瓦であろうか、点在する集落の屋根瓦は朱色が圧倒的に多い。それが緑に溶け込み非常に美しい。まるでヨーロッパの町で見られる朱色の瓦の街並みと同じような感覚だ。

何年か前に青春 18 きっぷで山陰を旅した時に、うそかほんとか JR 益田駅で清流日本一の高津川ブランドアユのことを知った。それからは、ここのアユの味を確かめてみたいと思っていた。釣ったアユをぎりぎりまで生かすなど鮮度を可能な限り良好に保持する努力をして自宅に持ち帰り、さっそく食した。「うまいー」の一言。文句なしの絶品であった。姉夫婦にもお裾分けしたが非常に好評であった。鮎は川によって全然味が違う。水の汚れが目立つ都市周辺の川、特にダム下流のものは概してまずい。味の良し悪しにはいろんな要素が関係するであろうが、ダムの有無と水質が大きく影響していると思う。

＜先輩釣り師のスタイル＞

こんな釣りライフがあるのかと非常に驚いたことなのだが、お世話になった 2 人のアユ釣り師はもう 2 か月も車に寝泊まりして釣りをしてらっしゃる。これには目からウロコが落ちた。ワゴン車を改造して写真（次ページ）に示したような仕様にしてある。足を延ばして寝るスペースを確保し、他にもアユ釣り道具を機能的に使えるように収納に工夫がされている。窓には暑さで寝苦しくないように網戸が入り、水に浸かった釣り服を干せるように

ハッチバックに工夫を凝らしている。また、テーブルをセットして仕掛けつくりや読書まで可能にしている。それに比べて私の車（写真左端）は、2～3 日寝たら足腰が痛くなってくるようなものですね。彼らから見ればピヨピヨの車である。

小林氏の車中

今回のベースキャンプは川傍にある道の駅。ここは車で寝泊まりするには諸条件がいい具合に整っている。オトリのアユを販売しているお店があり、アルコールを確保できるコンビニがあり、温水シャワーがあり、食堂があり、産直の物品販売があるなどで食と住は困らない。格安に生活できるとともに釣りに専念できるのである。

また、もう一つ驚いたことがある。日本一の清流のブランドアユというだけあって、釣ったアユはオトリ屋さんや漁業組合が買い取ってくれるのだ。私が釣っていた時は、1 kg 5,000 円で買い取ってくれていた。そして釣ったアユは活〆アユとして 1 kg　9,800 円で、網で獲ったアユは生アユとして 1 kg 7,300 円で一般に販売している。網より釣りの方が高いのは味が良いからだ。大きさにもよるが、1 kg当たり 20～30 匹程度ではないかな。差し引き 4,800 円の儲けが漁協に入るようだ。

2 か月も滞在していれば、毎日釣ったものは食いきれない。そうかと言って掛かったアユは体に大きな傷がついているのでリリースをしても生き延びるかどうかわからない。それを買ってくれるのだから気合が入るのも当然だろう。年金生活者には有難いと言っていた。それに、家でゴロゴロして奥さんから嫌がられることを考えると、しばらく家を離れて過ごすのもリタイア組の遊び方としては価値有りだと思う。

友釣り風景（和歌山有田川）

このように好条件がそろっているので、高津川には、毎年、アユ釣りシーズンには全国から入れ代わり立ち代わり釣り人が車で乗り付けて来るという。道の駅での宿泊は、車の居住性も上がっているし、宿泊代はタダなので、釣り目的以外の観光目的でもよく見かけるようになった。今後も益々増えてくるように思う。

＜夢中にさせるアユ友釣りとは＞

ところで「アユの友釣り」とはどのようなものか簡単にご紹介しよう。釣りと言えば、皆さんはエサ釣りを想像されるだろうが友釣りはエサ釣りではない。アユのなわばりを持つ習性を利用した日本独特の釣法である。竿先に繋いだ糸の先端をオトリアユの鼻（鼻環）に通して、さらに尻尾近くに掛け針をセットして流れに放し、なわばりを守ろうとオトリアユに後方から体当たりしてくる野アユを掛け針に引っかける（写真参考）。

友を釣ると言われる所以はここにある。上手な人はオトリの操作がうまく、アユを弱らさずに、元気に泳がすことができるのだ。元気なオトリアユには野アユが攻撃してくる。弱ったものは相手にされない。喧嘩の相手にならないということだ。オトリアユに負担をかけずに泳がせるために糸など仕掛けの水中抵抗を極力抑えている。そのため仕掛けは非常に繊細にできており、現場でもつれるなどのトラブルが発生した時は老眼鏡をかけても大変である。また、オトリアユにも個性があって、あまり泳ぐ気がないものもいる。それを何とかして泳がせるのである。家康の「泣くまで待とうホトトギス」のように「泳ぐまで待とうオトリアユ」である。「殺してしまへホトトギス」までいかなくても乱暴な竿操作をすればすぐに弱ってしまい、一層泳がなくなる。竿先の動き、糸の動きに神経を集中し、体は微動だにせず、竿を持ち続けなければならない。技術に加え、我慢・忍耐が求められる釣りでもある。またポイント選びでは、炎天下で大小の石が転がっている足場の悪い河原を歩き回ることや、急流の中に入ることもあり、体力が求められる。このように技術と忍耐と体力、この 3 つを備える要件は一定の経験を積んだ年配者で、しかも体力がある人となる。

前述した先輩釣り師はこれらを備えた人である。ここで、2 か月間、毎日、アユ釣り道に励んでいらっしゃる。しんどい時もあるが、もっと上手くなりたいと思う毎日であるらしい。アユ釣り道は一生修行らしい。2 人の師匠からは、「上手くなりたいなら最低限、一週間ぐらいまとまって来なさいよ」と言われた。定年したとはいえ、まだ仕事をしている身分であり、連続一週間はしんどいね。いろんな釣りをした私だが、この釣りは他の釣りには無い魅

力があり、すっかりハマってしまった。まだまだ、すべての点において未熟者で、釣果も芳しくない。今後は彼らの釣行スタイルを大いに参考にして、苦行でもよいから腕を磨きたいと思っている。

＜昨今のアユの川に思う＞

奥が深く、飽きが来ず、永遠に楽しませてくれるアユ釣りだが、全国の川が環境面から見て非常に劣化してきている。年を追うごとに魅力あるアユ釣りができなくなってきている。最大の問題はダムの建設である。建設後、長期間たって、その影響が間接的なものを含めて一層顕著になってきた。アユは、川で生まれ、海で幼少期を過ごし、再び川で育つ。このように海と川をダイナミックに利用する魚にとっては、川の分断は致命的なことである。当然、ダム上には遡上できない。その代償として、ダム上流はもとより下流にも人工種苗のアユを放流している。しかし、人工種苗は飼育プールで人工の餌を与えられ大量生産された養殖物であり、遺伝子の多様性も低くなり、天然アユ本来のなわばりの習性を持ったものが年々少なくなり、友釣りには非常に不向きなものが増えている。このため多くの河川では少し前までは、なわばりを持つ性質の強い琵琶湖産の小アユを放流していたが、琵琶湖で発生した冷水病が蔓延し、放流しても大半が死んでしまうという問題が発生している。それにアユ以外の水生生物がアユと混ざって一緒に持ち込まれるので生態系への影響も懸念されている。

本来の自然な姿である天然アユの自然遡上に力を入れるべきであろうと思う。しかし、ダムのせき止めにより下流への小砂利の補給が少なくなり、下流に良好な産卵場所ができなくなっている。前述した T 博士はアユの産卵場の改善を目的に全国各地の河川を飛び回っている。

釣り界では、どんな魚に対しても「昔はよく釣れた。昨日はよく釣れた。しかし今日はダメ」という言葉をよく聞くし、私もよく使う言葉であるが、その本心はそんなに真剣なものではなく、あいさつ的な用語になっている。しかし、アユについてはそれがあいさつ話で済まない深刻な問題となってきている。私は温暖化が気になっている。昨今の局所的な集中豪雨（温暖化による水蒸気発生量の増加）により好適な産卵場の流出や生まれたての稚魚が流出･死滅するなどの被害が出ている。海に比べて川は環境修復力が弱く、少しの外圧でも取り返しのつかない大きな影響が出ることがある。また、アユの生息に適した水温を越える河川水の高水温化傾向はアユの分布域を変えていくのではないだろうか。釣り人を含めてアユの恩恵を受けている人々はこの事態をどのように受け止め、何をすればよいのだろか。

アユの友釣りは華道や茶道、陶芸などと並んで日本の伝統文化だ。その技は先人から継承･伝承されてきたものである。しかし年々釣れなくなってくると伝統文化の喪失につながりかねない。友釣りは次の世代にも伝えたいと切に思う私である。そこで、まずはアユを食うのが大好きな息子に、この釣りの楽しさを知らせたいと思っている。

＜これからも気合を入れて！＞

先輩釣り師から「仕事も大切だけど、自分のしたいこともやってくださいよ。もう 60 歳まで働いたのだから・・・。特にアユ釣りは早い目にね。」という助言。その奥には「アユ釣りは足腰が弱ってしまえば無理ですよ。いつまでもできないですよ」ということを暗に示しているようだった。冒頭の岩手の釣り師の「毎年、毎年が勝負」との言葉が明日の自分かと思った。

この夏の朝日新聞の天声人語で、昨年、日本人男性の平均寿命が初めて 80 歳を超えたことを知った。日本人の人生の持ち時間はずいぶん長くなった。しかし、「健康寿命」になると少し話が違うらしい。健康寿命とは日常生活を支障なく送れる平均年齢をいい、男性が 70 歳、女性は 73 歳だそうだ。平均寿命よりだいぶ短い。差し引きの歳月は、介護や入院が必要な期間ということになる。平均寿命と健康寿命との差は、日常生活に制限のある「不健康な期間」を意味するらしい。その差は、平成 22 年で、男性 9.1 年、女性 12.7 年となっている。前述したように、アユ釣りは日常生活を支障なく送れる体力だけでは駄目である。それ以上の体力が必要である。アユ釣り寿命を 70 歳程度と考えると、私は 61 歳、あと 9 年。納得できる釣りをするためにも、これからも精力的にアユ釣りをしていこうと考えている。